

〈研究論文〉

博士後期課程中国人日本語学習者の博士論文草稿に 現れた誤用の特徴・原因と指導方法 —助詞、形式名詞、漢語に焦点を当てて—

板 井 美 佐

【要旨】

板井（2021、2022）では、本学博士後期課程在籍・修了者である日本語学習者博士論文草稿から収集した誤用文を、9つの分類項目（①接続、接続詞、連体修飾節、②テンス・アスペクト、③ヴォイス、④ムード、⑤コロケーション、⑥呼応表現、主述呼応、⑦は／が、⑧動詞、⑨副詞、形容詞）に分け、誤用文が生ずる環境を、主に学習者の母語（中国語）との対応関係から分析・考察を行ない、指導のポイントについても示した。

本稿では、板井（2021、2022）の研究概要を踏襲した上で、13の分類項目と構成のうち、⑩助詞、⑪形式名詞、⑬漢語を選び、上記中国人日本語学習者の博士論文草稿に現れた誤用傾向・要因について、先行研究で示された結果を踏まえて分析・考察した。その目的は、中国人日本語学習者が書いた論文における誤用の特徴、原因を解明し、指導のヒントとして有効な指導方法を究明することである。

キーワード：博士後期課程、学術論文、誤用の特徴と原因、有効な指導方法

1. はじめに

筆者は、本学日中連携大学院（国際日本学研究指導）において、現職日本語教員を対象とした博士論文指導を行なっている（板井 2020、2021）。板井（2021）で指摘しているように、日本語レベルが上級以上で、現役の日本語教員であっても、彼女らにとって日本語は第二言語であることから、誤用は避けられず、一部定着化している誤用も多い。

中国語と日本語には、同形漢語がある。方（2018：71）によれば、「中国人日本語学習者にとって二字漢語の習得において母語知識の負の転移が起こり、誤用が誘発されやすい」という。

たとえば、日本語「完成」と中国語「完成」は、各々の辞書に「完成すること」という共通の語義が記述されている。しかし、中国語の完成は「完成任務」と書けるが、日本語で「完成」を用いて「任務を完成する」と書くと、違和感を持つ人が多いだろう。この場合、日本語では、和語である「終わらせる」を用いるのが適切である。

(1)

「誤」皆任務を完成し、給料をもらった。大家完成任务、拿钱了

「正」皆任務を終わらせ、給料をもらった。

中国人上級日本語学習者が論文を書く際に見られる誤用については、初級レベルで学習したが未習得が原因の誤用、母語である中国語の影響から生じた誤用、アカデミック・ライティングに関する知識不足に由来する誤用があることは、板井（2021、2022）でも指摘してきている。

本研究では、板井（2020、2021）の研究概要に倣い、収集した博士論文の学生誤用文を訂正文と共に示す。さらに、博士課程の中国人日本語学習者（以下CNと略記）が、博士論文を執筆する際の、誤用の特徴とその原因を、CNの誤用に関する先行研究の結果を踏まえて分析・考察をし、有効な指導方法についても示唆を行なう。

本研究の構成は以下の通りである。まず、第2章では、CNの誤用原因に関する研究を概観する。第3章では、調査概要を示し、第4章では、先行研究の結果を踏まえて誤用文を分析・考察し、各誤用の特徴と原因について述べる。最後に、第5章では、本研究のまとめを行なう。

2. 先行研究

2.1 誤用研究

2.1.1 張（2008）の研究

CNの日本語の漢語動詞構文を使用する際の誤用としては、特に漢語動詞が取る二格をヲ格にする誤用が見られる（張 2008：205）とされている。

張は、CNが日本語の漢語動詞の二格構文を習得する際の誤用が生じやすい動詞、母語の影響についてアンケート調査を実施し、その結果から、二格を取る漢語動詞をその意味役割により以下の9種類に分類した。

表1 二格を取る漢語動詞の意味役割と動詞、考察の対象の有無

No	意味役割	動詞	考察の対象 有無
①	一方的方向の向かう対象	投書する／求婚する	○
②	態度の向かう対象	反対する／同情する	○
③	移動の帰着点	加入する／出席する	○
④	存在の場所	居住する／隠居する	○
⑤	変化の結果	変色する／生息する	○
⑥	成就判断の基準	合格する／成功する	○
⑦	心的動作	感動する／満足する	×
⑧	関係	所属する／一致する	×
⑨	その他	影響する／違反する	○

（張2008：207を元に筆者作成）

その結果、二格をヲ格に間違えた割合が大きいものから順に、〈態度の向かう対象〉、〈その他〉、〈移動の帰着点〉、〈変化の結果〉、〈成就判断の基準〉、〈一方的行為の対象〉、〈存在の場所〉であることが明らかになったとしている。一方、〈成就判断の基準〉の場合は、二格をヲ格やデ格に間違えた割合が大きく、〈存在の場所〉の場合は、ヲ格よりデ格に間違えたものが多い（張 2008 : 218）としている。

この誤用原因としては、従来の日本語に対応する中国語が〔SVN〕という他動詞構文であるからだという説明では不十分であると、同じ〔SVN〕構文でも〈態度の向かう対象〉の場合はヲ格を選択しやすく、逆に〈存在の場所〉の場合はヲ格を選択しにくいことを明らかにしている。

しかし、この研究では、格助詞を意味役割から分類し、その誤用原因を究明しているだけで、誤用原因として格助詞と文型とのつながりまでは詳述していない。

2. 1. 2 陳 (2002a)、張 (2009)、熊・玉岡 (2014) の研究

日本語と中国語には、同形同義語が多く存在する。文化庁の『中国語と対応する漢語』(1978)によれば、日本語教科書10冊から抽出した約2,000語の漢語のうち、同形同義語は3分の2を占めるといふ。

陳 (2002a : 43-50) は、二字漢語 (日台/日中) である4,354語を調査し、辞書的意味で分類したところ、「同義」が全体的な割合の約半数であり、日中漢語の55.1%を占めたと述べている。これらの漢語はCNには習得しやすい漢語であるという一般の理解がある。

一方、張 (2009) では、母語転移が最も頻繁に起こる漢字語彙という観点から、漢語語彙の中から「同形同義語」、「同形だが日中間で意味にずれのある語」を扱い、同形同義語及び同形類義語の中日間における対応関係を分析している。その結果、「同形類義語」は中日間で意味の類似度が高いため、文レベルでこれらの語彙が使用された場合は、「中国語にしか存在しない語彙」・「中国語の単語の意味」・「単語の品詞性」の転移が起こり、誤用が生じるとしている。

熊・玉岡 (2014 : 25) は、日中同形同義語の品詞分類を用い、165名のCNを対象に日本語のテスト調査を行っている。その結果、「日＝中 (日中両言語で品詞が完全に同じである語)」は57.99%、「日<中 (日中両言語で同じ品詞もあるが、中国語に独自の品詞もある語)」は4.84%、「日>中 (日中両言語で同じ品詞もあるが、日本語に独自の品詞もある語)」は28.85%、「日U中 (日中両言語で共有する品詞もあるが、それぞれ独自の品詞ももつ語)」は2.60%、「日≠中 (日中両言語で品詞が完全に異なる語)」は5.71%であることが明らかになったとしている。また、各々の品詞タイプが、どのように品詞の習得に影響しているかを検討した結果、上記5つのタイプのうち、「日＝中」、「日<中」、「日U中」の同形語の文レベルでの使用は、語彙の品詞に関する知識及び文法知識の形態素変化などに支えられていることが分かったという。各タイプの品詞性の習得状況にも違いが見られ、低い方から習得順に並べると、「日≠中」、「日U中」、「日>中」、「日<中」、「日＝中」となったとしている。

3. 調査概要

本調査（2019年4月～2022年1月まで）において7名の大学院在籍・修了生が執筆した博士論文草稿の論文数は、231編である。当該論文には、4ページ程度の短い論文もあれば、217ページ（2020年6月1日時点）の長い論文もある。そのうち、先行研究で指摘された誤用を中心として扱い、板井（2021）の分類表（表2参照）に従って分類すると、①から⑬となる。

表2 誤用タイプ（板井、2021）

誤用タイプ	
①接続、接続詞、連体修飾節	⑩助詞
②テンス・アスペクト	⑪形式名詞
③ヴォイス	⑫指示詞
④ムード	⑬漢語
⑤コロケーション	
⑥呼応表現、主述呼応	
⑦は／が	
⑧動詞	
⑨副詞、形容詞	

（筆者作成）

上記7名の各誤用の数と誤用率を表3に示す。

表3 各誤用の数と誤用率

	接続 接続詞 連体 修飾	テンス アスペ クト	ヴォ イス	ムード	呼応 表現 主述 呼応	は／が	動詞	副詞 形容詞	助詞	形式 名詞	指示詞	漢語	計
学習者A	122	22	21	12	26	69	25	22	88	15	43	34	499
学習者B	83	54	76	24	45	198	69	37	180	35	64	20	885
学習者C	104	12	11	19	46	56	49	10	181	39	30	18	575
学習者D	67	11	14	11	13	158	17	11	90	21	30	16	459
学習者E	79	27	28	13	18	49	13	13	106	25	17	14	402
学習者F	27	17	10	12	23	127	16	7	42	22	16	14	333
学習者G	82	25	19	22	15	63	12	9	135	20	32	48	482
計	564	168	179	113	186	720	201	109	822	177	232	164	3,635
%	15.52%	4.62%	4.92%	3.11%	5.12%	19.81%	5.53%	3.00%	22.61%	4.87%	6.38%	4.51%	

（筆者作成）

①～⑨については板井（2020、2021、2022）で既に分析・考察を行なっている。本稿では、分類表のうち、⑩助詞（22.61%）、⑪形式名詞（4.87%）、⑬漢語（4.51%）を取り上げて論ずる。その理由は、助詞の誤用率は第1位であり、形式名詞は種類が少ないにもかかわらず順位が高順位であること、漢語は中国人学習者に特有な誤用であるからである。尚、⑫については

紙幅の制限により別稿としたい。

第4節では、上記誤用分類表の配列に従い、誤用文・訂正文ともに取り上げ、先行研究の結果を踏まえつつ、誤用の特徴とその要因について分析・考察を行ない、指導の際に有効と思われるヒントも適宜示す。

尚、誤用文における誤用箇所と訂正箇所については太字で示した。誤用文は全て生データで、原文通りに入力してある。但し、執筆者のプライバシーを保護するために、論文に書かれている執筆者が特定できそうな情報はアルファベット、あるいは、〇〇印に置き換える等して修正を加えた。

活用語が前に来る場合は、その部分までを太字にした。見出し項目として中心的に扱う項目は太下線で示した。脱落については、当該項目であるか否かに関わらず、脱落箇所には「〇」を挿入した。

4. 各誤用タイプにおける誤用の特徴・原因、指導のヒント

4.1 助詞

4.1.1 助詞の脱落

(2)

「誤」本小節で〇、話段例を挙げながら検討していく。

「正」本小節では、話段例を挙げながら検討していく。

(3)

「誤」実践1及び実践2〇は、(中略)図1の通り実施する。

「正」実践1及び実践2では、(中略)図1の流れに従って実施する。

(4)

「誤」選択肢として現れる単語〇は、それ以外の単語帳で学習した単語も混ざっている。

「正」選択肢として現れる単語には、それ以外の単語帳で学習した単語も混ざっている。

(5)

「誤」単語暗記アプリによる語彙学習〇の促進効果についての研究が行なわれてきている。

「正」単語暗記アプリによる語彙学習への促進効果についての研究が行なわれてきている。

(6)

「誤」その訳と平仮名で得られる読み方〇の対照により、正解を選択することが可能である。

「正」その訳と平仮名で得られる読み方との対照により、正解を選択することが可能である。

(7)

「誤」問15において〇選択肢は2つのみ〇選択設定をした。

「正」問15においての選択肢は2つのみの選択設定とした。

助詞を2つ以上重ねて使う「重ね使い」がなされるべき箇所、1つの助詞しか使われていないケースが非常に多かった。その代表的な例が、「で／は（誤）→では（正）」、「は（誤）→には（正）」及び「の（誤）→への（正）」、「の（誤）→との（正）」、「において（誤）→においての（正）」である。(2)～(6)では、「は格」、「で格」、「に格」、「へ格」、「と格」、「の格」が脱落しており、脱落箇所には主題の「は格」、あるいは「の格」のみが示されている。最後の(7)は助詞相当句の後に来るべき「の格」が落ちている。

(8)

「誤」協力的な意識付けに関しては、実践2では、○を例とし、考察した。

「正」協力的な意識付けに関しては、実践2で、○を例とし、考察した。

(8)は主題をどこに置くかの判断ミスが起きた例である。主題は「実践2」ではなく、「協力的な意識付け」である。「実践2」は単なる例であることからすれば、「は格」が文頭に置かれるべきである。CNは、助詞相当句は単独使用される助詞類であると誤解しており、文頭に「は格」が来ないのであれば、文頭に後続する箇所に来るべきだと考え、「実践2では」と書いたのだという。

(9)

「誤」タスクシートの記述からは、認知面の学習成果を明確にする。内省シートの記述からは、情意面の学習成果を明確にする。

「正」タスクシートの記述からは、認知面の学習成果を、内省シートの記述からは、情意面の学習成果を明確にする。

(9)は、対比の「は」が意識されていなかったことから、「は格」が脱落した誤用例である。

(10)

「誤」この中は、出版年が最も早い論文は李（2017）によるものである。

「正」この中で、出版年が最も早い論文は李（2017）によるものである。

(10)は「～の中で、最も／一番＋形容詞＋名詞」の文型が習得できていないケースである。

(11)

「誤」各自は考えた解答を挙げる行動が観察できた。

「正」各自で考えた解答を挙げる行動が観察できた。

(12)

「誤」それぞれの目的や談話の特徴に合わせて工夫している。

「正」それぞれの目的や談話の特徴に合わせて工夫している。

(13)

「誤」伝達機能は、発話者自らを言い出す自発系（中略）、細かく分類した。

「正」伝達機能は、発話者自らが言い出す自発系（中略）、細かく分類した。

(11) と (12) の「各自」、「自ら」は人に対して、(13) の「それぞれ」は主に物に対して使われる名詞であるが、CNはこれらがどの品詞に属し、どのような助詞と接続するのかを明示的に学習していないという。目にしてはいるものの、意識的に正しい使い方を学習する機会を得ていないため、格助詞が接続しない、はだかの名詞として使っているケースが多い。

4.1.2 助詞の付加

(14)

「誤」ピアで複数の意見が挙げた場合には、その正否について着実に検討を行なうことは、タスク達成に導く条件となりうる。

「正」ピアで複数の意見が挙げた場合に、その正否について着実に検討を行なうことは、タスク達成を導く条件となりうる。

(15)

「誤」残りの555件においては、(中略)「利用していない」という回答が26件あった。

「正」残りの555件において、(中略)「利用していない」という回答は26件あった。

4.1.1の助詞の脱落における「重ね使い」の片方が落ちているケースとは逆のケースも、「重ね使い」落ちほどは多くはないものの、存在している。ここでの誤用原因はどこにあるのだろうか。いずれの誤用例も、文全体を眺めてみれば、主題はどの句にあるか一目瞭然である。正しくは、～に「検討を行なうこと」、～において「回答」である。後続する句に主題の「は」があれば、冒頭にもう一つの主題が来ることは矛盾する。そこで、「には(誤)→に(正)」、「においては(誤)→において(正)」となり、どちらも「は格」は過剰な付加であることがわかる。

4.1.3 助詞同士の混同

(16)

「誤」ピア・リスニングでは、認知面における効果を期待できる。

「正」ピア・リスニングでは、認知面における効果が期待できる。

(17)

「誤」ピアで共有した情報により、リソースの増加が実現させた。

「正」ピアで共有した情報により、リソースの増加を実現させた。

(18)

「誤」回答者が、現在の日本語単語アプリに対する評価は、「役に立つ」に集中している。

「正」回答者の、現在の日本語単語アプリに対する評価は、「役に立つ」に集中している。

(19)

「誤」その録音を点数をつけてもらう機能がほしい。

「正」その録音に点数をつけてくれる機能がほしい。

(20)

「誤」ローマ字は、(中略)問題に解決するヒントになる。

「正」ローマ字は、(中略)問題を解決するヒントになる。

(21)

「誤」ヒントから、問題を解答することができる。

「正」ヒントから、問題に解答することができる。

(22)

「誤」〇〇単語帳は15のトピックに編成されており、合計183冊である。

「正」〇〇単語帳は15のトピックで/から編成されており、合計183冊である。

(23)

「誤」学習者が協力の意識が足りないことが推察された。

「正」学習者に協力の意識が足りないことが推察された。

(24)

「誤」具体的な例を以下の通りである。

「正」具体的な例は以下の通りである。

(25)

「誤」次章から、本章で述べた理論に基づき、実践を行なうこととする。

「正」次章では、本章で述べた理論に基づき、実践を行なうこととする。

(26)

「誤」この結果を基づき、(中略)以下の提言をする。

「正」この結果に基づき、(中略)以下の提言をする。

(27)

「誤」語彙学習ストラテジーがは学習者が(中略)使う手段のことである。

「正」語彙学習ストラテジーとは学習者が(中略)使う手段のことである。

(28)

「誤」対比を表す“〇〇” がは総称的指示があるが、“▽▽” がはない。

「正」 対比を表す“○○”には総称的指示があるが、“▽▽”にはない。

(29)

「誤」 中国語母語話者が○○を述べる文の中で、方法、経験などがあつた。

「正」 中国語母語話者が○○を述べる文の中には、方法、経験などがあつた。

(30)

「誤」 活動のプロセスをどのように聴解活動に寄与するかという点に着目する研究はない。

「正」 活動のプロセスがどのように聴解活動に寄与するかという点に着目した研究はない。

(31)

「誤」 問題の解答について、ピアに確かめている。

「正」 問題の解答について、ピアで確かめている。

(32)

「誤」 解答形成まで辿り着くまでピアで努める姿勢が見られた。

「正」 解答形成へと辿り着くまでピアで努力する姿勢が見られた。

誤用の種類としては、「脱落」と「付加」と比べると、「混同」の誤用例は大量に存在する。(16)～(18)は、「が+可能動詞」、「を+他動詞」、「連体修飾節中の『の』」が習得できていなかった例である。

「混同」の誤用において、〈一方的方向の向かう対象〉の「解答する」、〈態度の向かう対象〉の「賛成する」、「反対する」、〈移動の帰着点〉の「出席する」、「参加する」、〈成就判断の基準〉の「合格する」、「成功する」、〈心的動作〉の「感動する」、「満足する」、〈関係〉の「一致する」、〈その他〉の「つける」、「影響する」、のような対象をニ格で示すタイプの動詞にヲ格を使用した誤りが多かった。これらの誤用原因については、日本語に対応する中国語が[SVN]という他動詞構文であるということ概ね説明がつくように思う。また、これらは単純に助詞の選び間違いである。しかし、ここに示す(20)の「解決する」は(21)の「解答する」と「解」が同じであることから、単純に(21)のルールを当てはめて正用を導くことはできない。また、(22)の「編成する」は級外語彙であるため、語彙レベルとしては難易度が高く、そのため用いるべき助詞について習熟できていないことが考えられる。

(24)～(27)までは、本来アカデミック・ライティングを学ぶ際に、文型の中で学ぶ助詞が習得できていないケースである。(28)から(30)までの誤用原因は文型とリンクしている。いずれの誤用文も、文末に「である」、「がある」、「はない」の存在を示す文末形式が来ている。用いるべき文型は順に「は～である(27)」、「には～あるが、～にはない(28)」、「には～がある(29)」、「が～どのように～か(30)」となる。このタイプの文型の習得は遅れており、この文型が出現すべき場所において誤用が多く発生していると言えるだろう。

(31)は指導の際に執筆者の意図を理解しない限り、修正ができないケースである。修正をせずに「に」のままにすれば、確認には相手が必要であることを示唆している。これを

「で」に修正すれば、主体はピアと一緒に確認を行うという意図が込められることになる。段落全文を熟読し、執筆者の文意を確認しながら「に」なのか、「で」なのかの確定をする必要がある。最後の(32)は、「まで」格の二重使用が行われている。通常、格助詞は「を格」をはじめとして二重使用は避けるという制約が存在する。その制約からすれば、「まで」を「へと」と修正する必要があるだろう。

4.1.4 受け身文の助詞の混同

(33)

「誤」大谷(1991)では、(中略)ヲ格においてヲを付けるよりも、無助詞格が自然になる場合があることを指摘された。

「正」大谷(1991)では、(中略)ヲ格においてヲを付けるよりも、無助詞格が自然になる場合があることが指摘された。

学習者は初級において直接受け身文を、「私は+人に+受け身動詞」という文型で学ぶ。一方、所有物/迷惑の受け身文については、「私は+人に+名詞を+受け身動詞」という文型を学ぶ。この初級で学んだ文型で使用された助詞「を」は学習者の記憶に刷り込まれており、受け身文を書く場合に影響を与えているようである。論文を書く場合には、「筆者(出版年)では、+述語の普通体が+受け身動詞」となり、受身動詞に前接する助詞は「が」であるとしっかり教えるべきである。

4.1.5 助詞相当句の脱落

(34)

「誤」佐藤(2009)は、日本語母語話者と中国語母語話者の30名ずつ、教育現場の調査を行なった。

「正」佐藤(2009)は、日本語母語話者と中国語母語話者の30名ずつに対し、教育現場の調査を行なった。

「に対し、調査を行なう」の文型が習得されていなかった誤用例である。

4.1.6 助詞相当句の付加

(35)

「誤」問3「現在、どのような機関で日本語を学習しているか」の回答により、529件のうち、中等教育、高等教育、学校教育以外の学習者から回収した調査票は、それぞれ、43件、321件、165件であることがわかった。

中国語訳：通过第3题的回答可以知道……

「正」問3「現在、どのような機関で日本語を学習しているか」の回答~~が~~529件のうち、中等教育、高等教育、学校教育以外の学習者から回収した調査票は、それぞれ、43件、321件、165件であることがわかった。

(36)

「誤」以上から、日本語単語暗記アプリの利用による単語学習において、単語についての知識項目（発音／スペリング／語意／用法／語彙ストラテジー）のうち、単語の用法及び語彙ストラテジーの学習に対する利用者の評価は、ほかの知識項目に対する評価を下回っていることが明らかになった。

中国語訳：在通过日语背单词App进行的单词学习中、……

「正」以上から、日本語単語暗記アプリを利用した単語学習において、単語についての知識項目（発音／スペリング／語意／用法／語彙ストラテジー）のうち、単語の用法及び語彙ストラテジーの学習に対する利用者の評価は、ほかの知識項目に対する評価を下回っていることが明らかになった。

「通过」を直訳した「により」、「による」の誤用の出現は少なくない。中国語では構文的にこの形式が用いられることが多いためか、CNはよく考えずに、そのまま使ってしまうようだ。(35)は、アカデミック・ライティングの調査結果の書き方「回答〇〇件のうち」について習熟していれば、犯すことのなかった誤用である。(36)は名詞の「単語学習」を「日本語単語暗記アプリを利用する」が修飾している文構造を習得していれば、同様に犯すことのなかった誤用である。いずれも、母語の中国語からの影響が誤用の誘因となっており、その上にアカデミック・ライティング及び文構造の不完全習得が誤用原因となっていると思われる。

4.1.7 助詞と助詞相当句の混同

(37)

「誤」これらの研究は話し言葉における普通の名詞句だけを研究対象に研究した。

「正」これらの研究は話し言葉における普通の名詞句だけを研究対象として研究がなされている。

(38)

「誤」その情報は断片的で、体系性に弱い。

「正」その情報は断片的で、体系性として弱い。

(39)

「誤」eラーニングの有利な特性を生かしながら、デメリットとなるような特性の克服に対する有効なアプローチで、(中略)ブレンディッドラーニングが注目されてきた。

「正」eラーニングの有利な特性を生かしながら、デメリットとなるような特性の克服に対

する有効なアプローチとして、(中略) ブレンディッドラーニングが注目されてきた。

初めの例では、「主題は+『名目』として+受け身」の文型が、次の例では、「主題は+『原因』+『一つの側面』として+『評価』」の文型が、最後は「『立場』として+主体が+受け身」の文型が習得されていなかったことがわかる。しかし、この「として」の意味・用法を学習者の習熟度に合わせて網羅的に説明しているテキスト類は管見の限りない。鈴木(2006)はこの意味・用法を6つに分類している。そのうち、(37)は、「Aは、Bという資格・立場・名目で……する。」に、(38)は「Aは、Bという側面から考えると……だ。」に、(39)は、「Aは、BをCというものと{考えて/位置付けて}、……する。」に相当する。日本語教育の観点から述べれば、ここに示した「～として」は全て中級前期に導入されるものである。中級前期にはこの「として」を含む助詞相当句は一気に、あるいは毎課ごとに次々と導入されるため、学習者は意味・機能の相違点を十分に把握できないまま終わっていることが推察される。

(40)

「誤」 受益表現を用いるため、話者にとっては「嫁さん」が好ましいものとして受け止めることが分かる。

「正」 受益表現を用いたため、話者は「嫁さん」が好ましいものとして受け止めていることが分かる。

(40)はCNの典型的な誤用例である。日本語では、「主体+は」とすべきところに、「主体+にとっては」を用いている。このような文脈の場合、中国語では「対～来说」という構文を用いるため、この「対」を日本語に直訳をして「にとっては」としたのだという。この「対～来说」を用いる誤用例は非常に多いので、中級前期で教師が「にとっては」を導入する際に、中日の構文的な相違を文脈の中で説明していくことが必要である。

(41)

「誤」 学習者が日本語の○○表現に対する適切な理解力と運用能力を培うことに提案を行う

「正」 学習者が日本語の○○表現に対する適切な理解力と運用能力を養うための提案を行う

「(人・機関)に提案を行なう」という文型では、格助詞「に」を使用する。CNは、これと「『目的』ための名詞」という文型とを混同したのだという。

(42)

「誤」 日本語言語学、(中略)、「○○」における格助詞顕在型と無助詞型の使い分けには一つ

も触れられていない。

「正」日本語言語学、(中略)では、「誰か」における格助詞頭在型と無助詞型の使い分けについては一つも触れられていない。

「には～ない」でもよいが、前接する文によりフォーカスするには「には」より「について」のほうがふさわしい。

(43)

「誤」単語暗記アプリが学習者の語彙学習へのモチベーションに促進効果を与えている。

「正」単語暗記アプリには学習者の語彙学習に対するモチベーションに促進効果がある。

文が長くなればなるほど、使用すべき助詞が増える上に、文型構文を理解していない場合は、文の長さに応じて誤用が増える傾向にある。この誤用文は、「には+に対する+に+がある」を理解していなかったことが原因である。

(44)

「誤」Aは、“有人”については、不定名詞句として扱わず、“有”の構文上における“有人”についての考察であった。

「正」Aは、“有人”においては、不定名詞句として扱わず、“有”の構文上においては“有人”として扱った考察であった。

(45)

「誤」単語暗記アプリによる日本語語彙学習は体系的に語彙知識を習得させ、語彙応用力の上達を実現させるには、何が必要なのか、検討の価値がある。

「正」単語暗記アプリにより、日本語語彙学習において、学習者に体系的に語彙知識を習得させ、語彙応用力の上達を実現させるには、何が必要なのか、検討する価値がある。

誤用文には「における」と「において」、「による」と「により」の混同が非常に多く見られた。いずれも、CNは後接する品詞が名詞である場合に、その名詞が文の中でどのような役割を果し、後続する文の要素とどのようなつながりを持つかについて深く考えずに、名詞がある場合は自動的に「における」、「による」を選択しがちである。(44)は、文章の中に「Aにおいては、～として否定形、Bにおいては～として肯定形」という対比構文に気づかなかった例である。(45)では、CNが「学習者に体系的に語彙知識を習得させ、語彙応用力の上達を実現させる」手段が「単語暗記アプリ」であることに気づいていれば、「単語暗記アプリ」に後続するものが「名詞(日本語語彙学習)」であっても、誤用を犯しはしなかったであろう。CNも他の言語圏の学習者同様、文が長くなり、助詞相当句が多く使用されるべ

き構文環境に接すると、助詞・助詞相当句に前接する品詞が文の中でどのような役割を果たすのかが見えなくなってしまうようである。

(46)

「誤」学習ストラテジーの定義により、語彙ストラテジーは、学習者が語彙習得、～を指している。

「正」学習ストラテジーの定義によれば、語彙ストラテジーは、学習者が語彙習得、～を指している。

「によれば、～という」という引用表現と、「により」という道具・手段を示す表現形式を混同した結果、前者には「より」が、使用されていた。平仮名一文字の違いで、意味に相違が出るとは考えてなかったらしい。

4.2 形式名詞

4.2.1 形式名詞の脱落

(47)

「誤」つまり、当該語の仮名がヒントとして提示されている事ことである。

「正」つまり、当該語の仮名がヒントとして提示されているということである。

説明・結論を示す文型「つまり、～ということだ」の、「ということだ」が脱落するケースが非常に多く見られる。「つまり」の後文には話し手の判断・評価が来て、文末には断定の表現「ということだ」などが来やすい(市川他 2010: 384)。逆に言えば、「ということだ」を補わない限り、文としてはやや不完全・不安定なものとなる。導入する段階で「つまり、～ということだ」をセット・フレーズとして示した上で、繰り返し指導する必要があるだろう。

4.2.2 形式名詞の混同

(48)

「誤」「誰かが」のような格助詞を後続させるのが5,723件と、「誰かも」、「誰かなど」のような副助詞を後続させるのが104件あり、合計5,827件である。

「正」「誰かが」のような格助詞を後続させるものが5,723件と、「誰かも」、「誰かなど」のような副助詞を後続させるものが104件あり、合計5,827件となった。

(49)

「誤」情報を減らすという形を取るの2つの理由で、話し手が「ずっと自分に電話した」人物に“○○”の不定名詞句を用いる。

「正」情報を減らすという形を取るという2つの理由から、話し手は「ずっと自分に電話した」

人物に“○○”という不定名詞句を用いる。

(50)

「誤」先行研究では「広さ」と「深さ」の2つの側面におけるアプリ学習の促進効果を明らかにしていない。

「正」先行研究では「広さ」と「深さ」という2つの側面からアプリ学習の促進効果を明らかにしていない。

(51)

「誤」そこで、以下のような「ある人」の意味・用法を明らかにするのが本章の目的である。

「正」そこで、以下のような「ある人」の意味・用法を明らかにすることが本章の目的である。

(52)

「誤」プラス面における効果があると同時に、マイナス面における効果もあると確かめた。

「正」プラス面における効果があると同時に、マイナス面における効果もあることを確認した。

(48) から (52) は「の」と「もの」、「の」と「という」、「の」と「こと」、「と」と「こと」との混同である。「の」の誤用文出現の一つの原因は、「の」が話し言葉であることを理解していないことから生じている。河野 (2017 : 134) が指摘している通り、これら誤用は「文型としての誤用というよりも、むしろ話し言葉の干渉（場合によっては書き言葉）にあるという点」に留意すべきである。また、(52) は「と+引用述語」と「ことを+動詞述語」の区別ができていないことが原因で起きた誤用である。こういった誤用の指導では、初級に立ち返って文型を復習させた上で、ただ暗記させるような一方的なものでは効果はない。同掲書 (2017 : 138) でも指摘しているように、論文の意味内容を踏まえた上で必要文法項目を取り入れる。具体的には、「文の成分」、「品詞の概念」、「各品詞の働き」、「文の成分と品詞との関わり」、「抽象名詞主題文の特徴」、「容認度が異なる文の特徴」の指導を行きつ戻りつする中での誤用訂正こそ、形式名詞のような文法を習得させようとする。

4.3 漢語

漢字には表意性があるのでCNの日本語文への意味理解という点では利便性があるが、書くという運用段階では、品詞性や意味・用法上のズレがあることから、文として見た場合、不適切な表現となる可能性がある (川住 2005 : 53)。

4.3.1 中国語語彙から日本語語彙への品詞性の転移による混同

ここでは、誤用文の誤用箇所には太下線を引き、訂正文を () の中に入れて示すだけでなく、必要に応じて、理解の一助として中国語訳を訂正文の後ろに示す。

(53) 少しも文句した (文句を言った) ことがない。没有抱怨过。

上の誤用文は中国語から日本語への品詞性の転移である。(53)の場合、中国語では、動詞(“抱怨”)が使われるので、学習者は日本語では二字漢語名詞の「文句」+サ変動詞「する」と組み合わせた結果、誤用となっている。中国人日本語学習者の、「二字漢語」+サ変動詞「する」の過剰使用が起きていることがわかる。方(2018:74)は、CNが漢語を使用する際に、意味に焦点を当てすぎるあまり、統語的な特徴を軽視すると述べている。しかし、品詞性の転移の誤用は限定的であったことから、筆者が指導しているCNの日本語の品詞に対する理解については、語彙的統語情報についてもある程度習得が進んでいると思われる。

4.3.2 中国語にしか存在しない語彙の混同

(54) 先生は自分の経験、感悟(自分が感じたこと)をシェアしてくれる。老师会给我们其他的经历、感悟。

(54)の“感悟”は、中国語にしか存在しない語彙である。張(2009:66)によれば、中国語にしかない語彙の完全な転移は、通常は「日本語の表現を全く知らない時に」、あるいは、「日本語の言い方についての知識を十分に持っていない時に」生じることが知られているという。上に示した誤用の背景については、CNの日本語のレベルを考えれば、前者である可能性はほぼない。中国語における意味を日本語で表現するための統語的知識を持たないことから、中国語の表現をそのまま用いたのではないかと考えられる。

4.3.3 コロケーションの混同及び中日辞書の日本語訳の使用

(55)

- ①自信が上がった(ついた)。自信心提高了。
- ②その授業では頭を持た(使わ)なくていい。不用带脑子来。(板井2021再掲)
- ③授業では基本的なスキルが身につについて、日本の本を読んだりするとき、大きく助かった(非常に役立った)。在课上学到了基本的技巧、对看一些日本的书有很大的帮助。
- ④物事を多方面(さまざまな側面)から見られるようになった。可以让自己全面地思考问题。
- ⑤日本語では出ていく道(活路)が見えない。我感觉日语没有出路。
- ⑥これは自分の欲しい(欲した)生活ではない。我不想要这样的生活。(板井2021再掲)

論文指導現場においては、板井(2021)で述べた通り、「コロケーション」に関する誤用が非常に多く見られる。松本・堀場(2007:10)も、CNの日本語の語彙習得において、「同義語の知識は早く習得されるが共起語の知識は遅れて」と述べている。①の日本語の「自信」が名詞である場合は、通常「ある」、「つく」などの動詞と共起する。「自信が上がる」は中国語の「自信心提高了」の日本語訳(以下日訳とする)だと考えられる。②も「頭」と共起する動詞は「使う」である。これは中国語の「带(持つ)」から類推した誤用である。

③では「助かる」に前接する副詞として「大きく」は共起しない。この場合、「助かる」と共起する副詞は「非常に」である。文脈から考えると、「助かる」より、「役立つ」の方が相応しいと判断し、修正を行なった。④は中国語の「多方面」の直接的な転用である。⑤は中国語の「出路（出ていく路）」の日訳を行ったものである。「出ていく」と「道」は共起しない。⑥は形容詞「欲しい」＋名詞の構造を持っている。「欲しい」には、具体的な物が名詞構造に現れ、抽象的な名詞は使われない。もし抽象的な名詞に前接させる場合は、動詞「欲する」のた形「欲した」が相応しい。

(56)

- ①私は忙しい生活が好きだけど、自分自身を行き詰まり（袋小路）に追い込む必要はない。
我是喜欢忙碌的生活、但没必要把自己往死胡同里逼。
- ②全て真っ暗な中で探る（手探りをする）ような感じだった。一切就好像在摸黑。
- ③彼女は目が長い（はるかかなたまで見通している）。他眼光可长远了。

(56) は中日辞典の日訳をそのまま使用した混同の例である。中日辞典は、CNによって中国語で頭に浮かんだ語彙を日訳するのに使用されることが多い。しかし、田中（2015：124）によれば、辞書を使用して書いた箇所の正用率は61.2%であったという。辞書は日本語を産出する際の支援的な機能を果たしてはいるものの、辞書使用が誤用の原因の一つとなっていることを示唆している。また、辞書を参照しても、辞書にある日訳が文レベルから考えると適切ではないケースがある。辞書で検索した訳語が複数ある場合はその中から適切なものを選択するが、どの語彙が最も適切なのかについて学習者は判断できない場合がある。そのような場合は用例を参照するわけだが、同書では、用例参照をして書いた場合の誤用原因の一つとして、「コロケーション」を挙げ、適切な「コロケーション」情報を用例から読み取ることは困難であるとしている。学習者は、文脈を考えながらより適切な語彙を考え選び出すより、辞書にある日訳をそのまま使用したり、用例から不適切な「コロケーション」情報を用いたりする可能性がある。文脈に相応しい「コロケーション」を探るには、より多くの用例に当たる必要がある。

論文産出においては、意味、統語知識の他に、正しい「コロケーション」に関する知識が必要である。指導方法としては、田中（2015：125）が示した電子辞書の検索機能活用が指導方法として役立つ。検索の際には、同書が述べている動詞からではなく、「なるべく名詞から検索する」ことが肝要である。この方法によれば、①、②、③のような誤用は減らすことが可能であろう。

4.3.4 日中同形類義語との混同

(57)

- ①このような彼女の経験（体験）も私たちにとって勉強になる。这些她的经验也能我们从中受益。
- ②現在の大学生の素質（資質）は低下している。現代大学生的素质降下了。

ここで示した誤用例は、張（2009）の、中国語の単語の意味の転移が生じた例である。このままでも意味理解に大きな影響を与えはしないが、別の類義語を用いた方がより適切となる誤用のタイプである。誤用というより非用の類いであるため、指導の際に気づきにくく、違和感を抱きつつも放置してしまうことがあるケースである。原因としては、日本語の類義語間における意味的な差異を理解していない（川住 2005）ことが考えられるので、類義語のネットワーク構造を示した上で、それぞれの相違を理解させる必要がある。

4.3.5 日中同形異義語、「日中間で意味にずれのある語」との混同

(58)

- ①知識の拡張（～を広げること）でもいい、文法の整理でもいい、面白いと感じることはなかった。
- ②授業の時、ある人が活躍していたんです（陽気だった）。
- ③同世代の人たちの考え方に共鳴（共感）を覚える。对同辈们的心情有共鸣。
- ④「強迫（強制）の動機づけ」
- ⑤AはBとして結晶している（結実している）
- ⑥自分で思考し（考え）、ディスカッション（し）、探索（する）というような過程が好きだ。自己去思考、讨论、摸索的过程。
- ⑦100%努力しても、50%しか収穫できない（成果が出ない）。如果我付出100%、那我收获只有50%。
- ⑧こっそりチェックインに潜入した（忍び込んだ）
- ⑨単純（単）に日本語学習が好きだという理由から日本語を選んだ。
- ⑩池田・館岡（2007）により提出された（提示された）。
- ⑪全国通用の使用（統一的に使われている）である。
- ⑫教師から与えられた任務（タスク）だけでは、楽しくない。老师让我们做的、就是一个任务、一点都没有意思。
- ⑬外国語作文教育において、欧米で普遍的に採用され（広く）
- ⑭eラーニングの不利な（デメリットとなっている）特性の克服に対する有効なアプローチ（中略）が注目されている。
- ⑮日本語専攻には優勢を占めない（利点・メリットがない）。我觉得日语专业没有优势。

⑩単語暗記アプリの使用が語彙の自律学習に有利（効果的）であることが報告されている。

⑰あまり疲れないので、とても養生（健康）にいい。不是特別辛苦、就特別養生。

上の例は、日中同形異義語（②⑨⑩⑪⑬）、及び日本語・中国語ともに形態は同じだが、意味にずれがある語（①③④⑤⑥⑦⑧⑫⑭⑮⑯⑰）の誤用例で、中国語が日本語に転移されている例である。このようなケースは張（2009：67-68）によれば、「転移している単語が、日本語においてよりも中国語において基本語彙である性格が強い」という。続けて、これら誤用の背後の規則については、中国語の語彙は基本的に1種類であるのに対し、日本語の場合は、フォーマルな漢語語彙と日常的に使用される和語・外来語語彙という二重構造を構成していることが多く、その事情を学習者は知悉していないことから、馴染んでいる語彙を使ったのだと述べている。これは、本研究では、①（拡張する／広げる）、⑥（思考する／考える）、⑬（普遍的に／広く）に当たる。（58）で示したような誤用が多く出現していることから、張のいう「中国語の単語の完全な借用としての転移」が確認できたと思われる。このようなケースの指導方法としては、まず、漢語語彙と和語語彙の対照表を作成・配布した上で、誤用が出た際には、表を参考に、より適切な表現を示して修正させることが有効である。次に、理解が不十分な語彙については、中日辞典を引いて意味の確認をさせ、日中辞典で意味の再確認をすれば、これら誤用は減らせるだろう。

5. おわりに

本研究では、先行研究の結果を踏まえ、博士論文草稿の誤用文の特徴と原因について、中国語（学習者の母語）との対応関係から分析・考察を行ない、指導の際に有効と思われるポイントを示した。本節では、改めて主な誤用の特徴・原因と指導のポイントを総括して終わりたい。

まず、助詞の脱落では、「重ね使い」の片方が落ちているケースが非常に多い。助詞の「重ね使い」の用例を示した上で、誤用文全体を眺めさせ、主題はどの句にあるかを認識させることが助詞の「重ね使い」習得への第一歩である。

助詞相当句の付加では、アカデミック・ライティング及び文構造に関する不完全習得が誤用の原因である。混同の一例として「として」がある。「として」の意味・用法を学習者の習熟度に合わせて網羅的に説明しているテキスト類がないことも誤用原因の一つだと考える。中級前期には「として」を含む助詞相当句は次々と導入されるため、学習者は意味・機能の相違点を十分に把握できないままであることが推察される。

CNの典型的な誤用例としては「にとっては」がある。CNは、日本語では、「主体＋は」とすべきところに、中国語の翻訳である「主体＋にとっては（対～来说）」を用いがちである。この「対～来说」の翻訳を行なっている誤用例は非常に多いので、中級前期で教師が「にとっては」を導入する際に、中日の構文的な相違を文脈の中で説明していくことが必要である。

「における」と「において」、「による」と「により」の混同が非常に多く見られた。いずれも、CNは名詞が後続する場合に、その名詞の文中での役割、後続する文の要素とつながりについて深く考えずに、名詞が存在する場合は自動的に「における」、「による」を選択しがちである。名詞の文中での役割と後続要素とのつながりを十分に把握させる必要がある。

次に、形式名詞では、「の」と「もの」、「の」と「という」、「の」と「こと」との混同が多い。「の」の誤用文出現の原因は、「の」が話し言葉であることを理解していないことによる。指導の際に留意すべきことは、話し言葉から書き言葉への指導である。誤用の指導では、初級文型の復習と暗記は付け焼き刃の指導となる。そこで、論文の意味内容や文脈を踏まえた上で必要文法項目を取り入れる。そのような指導の中でこそ、形式名詞のような文法を習得させよう。

最後に、日中同形類義語との混同は、意味理解に大きな影響を与えはしないが、別の類義語を用いた方がより適切となる誤用のタイプである。原因としては、日本語の類義語間における意味的な差異を理解していないからだと考えられる。そこで、類義語のネットワーク構造を示した上でそれぞれの相違を指導すると効果的である。

日中同形異義語との混同は中国語が日本語に転移されている例である。これら誤用の背後については、意味理解が不十分な漢語をそのまま転用していること、1種類の中国語語彙と、漢語語彙と和語・外来語語彙という二重構造を構成している日本語語彙の相違をCNが十分に理解できていないことが原因であると考えられる。指導方法としては、漢語語彙・和語語彙ともに指導の際に示すこと、中日・日中辞典の使用を習慣化させることが有効であると考えられる。

今後の課題としては、アカデミック・ライティングの知識不足から生じる誤用の特徴とその原因を明らかにすることである。中国人上級日本語学習者に対する効果的な修士・博士論文指導の示唆を得るためには、このような誤用文の調査の継続と生データの蓄積が必要であると考えられる。

【参考文献】

- 板井美佐 (2022) 「博士後期課程中国人日本語学習者の博士論文に現れた誤用の傾向・要因と指導方法—コロケーション、呼応表現、は／が、動詞、副詞、形容詞に焦点を当てて—」『城西国際大学大学院紀要』25、127-148.
- 板井美佐 (2021) 「中国人上級日本語学習者の博士論文における誤用の傾向・要因と方法—中国語を母語とする大学院生の調査から—」『城西国際大学大学院紀要』24、1-23.
- 市川保子、板井美佐他 (2010) 『日本語誤用辞典—外国語学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント—』スリーエーネットワーク.
- 河野亜希子 (2017) 『『書く』ための効果的な文法指導開発へ向けた基礎研究—中等国語科教育における形式名詞『こと』の取り扱いの観点から—』九州大学大学院地球社会統合科学府、1-189.
- 河住有希子 (2005) 「中国人学習者の漢字語彙使用に見られる問題点」『早稲田大学日本語教育研究』07、53-65.

- 熊・玉岡 (2014) 「日中同形二字漢字語の品詞性の対応関係に関する考察」『ことばの科学』27、25-52.
- 鈴木智美 (2006) 「～として再考」『留学生日本語教育センター論集』32、1-17.
- 田中信之 (2015) 「文章産出過程における辞書使用—中国人学習者の場合—」『日本語教育』162、113-128.
- 張善実 (2008) 「漢語動詞の二格構文に関する誤用調査—中国人日本語学習者を対象に—」言葉と文化9、205-220
- 張麟声 (2009) 「作文語彙に見られる母語の転移—中国語話者による漢語語彙の転移を中心に—」『日本語教育』140、59-69.
- 陳毓敏 (2002a) 「日本語二字漢字語彙とそれに対応する中国語二字漢字語彙は同じか—台湾及び中国の中国語との比較—」『言語文化と日本語教育』24、40-53.
- 方小贊 (2018) 「日本語における二字漢語とその誤用に関して—『関心』の指導法も含めて—」『宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報』11、71-83.
- 松本順子・堀場裕紀江 (2007) 「日本語学習者の語彙知識の広さと深さ—中国語母語話者と日本語母語話者の比較—」『第二言語としての日本語の習得研究』10号、第二言語習得研究会、10-27.
- 水谷信子 (1993) 「『非用』と談話の展開」『日本語学』12、88-96.

Characteristics and Causes of the Misuses Appearing in the Drafts of Doctoral Dissertation for Chinese Students Learning Japanese Language, and Teaching Methodology: Focusing on Particles, Formal Nouns, Chinese Words

Misa Itai

Abstract

In her article published in 2021, Itai classified four labels of Doctoral Dissertations misuse: 1. connections, conjunctions, combined modifiers, 2. tenses and aspects, 3. voices, 4. moods while the last 4 labels were classified in her 2022 article as follows: 5. collocations, 6. concords, subject-predicate concords, 7. *WA* and *GA*, 8. verbs, 9. adverbs. They are analyzed and considered based on the results shown in previous studies, and she indicated the points of instruction.

In this article, Itai uses in her previous research outline 3 labels and structures such as 10. particles, 11. pronouns, 13. Japanese words of Chinese origin, which she analyzed and viewed in the reference to the results of previous studies.

The objectives of this paper are to elucidate the characteristics and causes of misuse in academic writings written by Doctoral candidate Chinese learning the academic level of the Japanese language, and to investigate effective teaching methods as given.

Keywords: post-doctoral courses, academic papers, tendency of misuses & reasons, effective teaching methods